

ねっとわあく

2017/10/25 Vol.69



シニアライフの 男女共同参画

目次

シニア世代のリアルボイス	2	〈コラム〉ラノベのススメ	12
〈座談会〉「シニアライフの男女共同参画を考える」.....	5	今、映画館は。シニアが支えるミニシアター	13
料理で実践「元気で長生き仲間づくり」	8	もう一度人生と向かい合うためのDVDガイド	14
子育て世代が親の老いに直面するとき	9		

我が国における高齢者（65歳以上）人口は、2017（平成29）年1月1日現在、3471万人で、総人口に占める割合（高齢化率）は27.4%となった。静岡県においても2017年4月1日現在、高齢化率は28.2%と過去最高を記録。2036年には、日本の高齢化率は33.3%になると推計され（※）、国民の3人に1人が高齢者となる時代を迎える。高齢化と少子化がますます進む今後、現在の社会保障制度は維持できなくなることが懸念される。

そして、戦後70年以上が過ぎ、生活環境の変化や、医療の進歩により平均寿命は延び続けている。2015（平成27）年には、男性80.7歳、女性86.99歳となった。（厚生労働省 第22回生命表）高齢になるにつれ女性の割合が増え、介護の担い手に女性が多いことを考えても、ジェンダー問題が深刻になるだろう。

さて、男女共同参画社会の実現を目指し変化してきた時代の中、現在のシニア世代は日本社会の価値観やシステムをどのようにとらえ、受け入れてきたのだろうか。「リタイア後の人生」は「セカンドライフ」「セカンドキャリア」と言われるようになり、元気で活動的な高齢者が増えている。高齢化率が21%を超えた超高齢社会である今、高齢者はどんな生き方を模索しているのだろうか。

そして、いずれシニア期を迎える若い世代は、どのように、「人生100年時代」に備え、よりいっそうの男女共同参画社会の充実を図っていけばいいのだろうか。

今回の特集からは、シニアライフの生き方、アンペイドワークである家事労働、介護は女性の役割と考える従来の性別役割分担などを通して、様々な生き方や、価値観、考え方の変化の一端を垣間見ることができる。

一人ひとりが生き生きと暮らしていくために、そして、世界のどの国も経験していない超高齢社会を乗り切っていくために、我々は何ができるのかを考えるきっかけになれば、と思う。

※ 2017年4月国立社会保障・人口問題研究所公表
「日本の将来推計人口」から



シニア世代のリアルボイス

「男女共同参画」という言葉はシニア世代にとって、人生の途中で突然前に立ちふさがったようなものである。その戸惑いと保守派の抵抗感に配慮して、「男女平等参画」を「男女共同参画」とした、とも聞く。

したがって、どこか日本語としての座りが悪いまま、公には使われても日常的に人びとの口に上りにくい。英語では Gender Equality。しかし、それを「ジェンダー平等」としたら、もっとシニア世代の意識から遠のくだろう。

さて「男女共同参画社会基本法」制定から約 20 年が過ぎようとしている。法律はその前文で「少子高齢化」「国内経済活動の成熟」を予測している。今それは、そのまま現実となった。「基本法」は「その状況にかんがみ」て、男女共同参画が「緊要な課題」だと述べている。

しかし、その危機感はまだ人びとに十分に共有されていない。例えば、静岡県の市町 35 のうち 15 自治体では女性の自治会長がいない。このゼロが並ぶ「静岡県男女共同参画白書」（平成 28 年度）が私たちの現実である。私も静岡県民になり、居住する町内会の 3 役に、これまで女性になったことがないと聞かされ驚いた。

男女共同参画が市民に浸透するのに 20 年では短すぎるのかもしれない。しかし、高齢社会とは、女性化社会である。無理に活躍しなくてもいいが、社会人としての責任と義務が、男性だけでなく女性にもある。そこで超高齢社会の最前線を生きる人たちに、「男女共同参画」という言葉を投げかけてみた。ここに登場する 5 人は、私が浜松市男女共同参画・文化芸術活動推進センター「あいホール」で出会った人たちである。

(須藤八千代)

家事を巡る

我が家の現実

その1

「男のやることじゃないー」



小松正徳さん (81 歳)

小松正徳さんは妻と二人暮らし。200 人程度の従業員がいる会社の管理職として猛烈に働

き、60 歳で定年。その後も、人材育成の仕事に約 6 年携わった。仕事の話は尽きない。「生きた知恵は現場の仲間にある」と書かれたリーダー養成マニュアルや KJ 法の話など、聴きたいことはいっぱいある。まさに、仕事を通じて人と出会う楽しさを経験してきた人だ。

仕事から離れてもさらなる出会いを求めて、浜松男女共同参画推進協会に「男女共同参画」について作文を書いて応募した。小松さんはそれまでの生き方を「鬼は外、福は内」という。つまり夫は外で働き、妻は家で家事と子育てという役割分担に生きてきて、ゴミ出しなど一度もしたことがなかった。

しかしある朝、家事は大きな仕事と気づ

いた。「ゴミを持って行くよ」と言うので、妻が「ありがたい、助かるわ」と応じた。その時以来、ゴミの分別まではしないがゴミ出しをするようになった。

小松さんはこの日、私たちのために妻手作りのドーナツを持って来てくれた。ドーナツはピンのギンガム模様のペーパーナプキンに包まれていて、おいしかった。パートナーは料理上手のようだ。

1975年、「私作る人、僕食べる人というコマースャルが批判を浴びたが、このライフスタイルこそ日本の高度経済成長をもたらした。妻と夫はきっちり役割を分けている。夫は外で働き妻は内を守る。インタビューをお願いしたメールの返信に「ドーナツでも作らせませんか」とあった。作ったのは妻、食べたのは私たちである。ごちそうさまでした！

家事を巡る

我が家の現実

その2

「ゴミ出しは僕の仕事」



齋藤幸宏さん (61歳)

齋藤幸宏さんは60歳で会社を定年退職したばかり。まさにシニアライフの1年生だ。その生き生きぶりは小学1年生に負けない。夫婦と齋藤さんの母親の3人暮らし。「妻は専業主婦だが、ゴミ出しは昔から私がやってきた」と胸を張る。特に主婦の朝は皆忙しく、認知症の母親をデイサービスに送り出すため、ゴミ出しなど、妻との家事の役割分担は重要だ。最近では、ゴミ出しをする男性も増えて

おり、ゴミ集積場での挨拶から世間話も始まる。

病に倒れた父親の介護、そして認知症の母親の介護についても、妻の支えがあつてこそ、と説明は元営業マンらしく要を得ている。

齋藤さんも「スーパーサラリーマン」で、「家庭を顧みなかった」とこれも正々堂々と宣言した。働き切ったサラリーマン生活に悔いなし、という印象である。父親の姿を見てきたので再雇用の誘いをきっぱり断り、最後を自分らしく自由に生きたいと考えた。40歳ぐらいから決まっていた。

「あいホール」とのつながりは、たまに図書館で見た「男のチャレンジ塾」のチラシ。そして「男女共同参画」については今日、初めて知りました！(笑)。

私も今日初めて知りました

女性のシニアライフ 事はじめ



橋本昭子さん (61歳)

「私も、今日初めて『男女共同参画』を知りました」と橋本昭子さんが笑いながら話してくれた。橋本さんの夫は前述の齋藤幸宏さんと同じ年齢で、定年退職して再雇用で働くことはせず、今は週4回、ジムに通い生き生きと新しい生活を楽しんでいる。専業主婦と猛烈サラリーマンのカップルで子ども2人を育ててきたということも共通している。

橋本さんは検査技師の資格を持つ。今は週3日、資格を生かし健康診断の技師として働いている。そのかたわら、「あいホール」を練習の場にする。「すずめの学校」という吹奏楽団に入り音楽も楽しんでいる。「あいホール」は楽器の都市浜松らしく、いつもどこかから楽器の音がするにぎやかな場所である。

橋本さんは、専業主婦としてゴミ出しを当然の役割と思ってやってきた。全く不満がなかったわけではない。しかし、「人の3倍は働いてきた」夫の仕事の大変さを、橋本さんがわからないように、夫からは家事の苦労は見えない。夫婦はそれぞれの役割に専念してきたのだ。時に、友だちとランチをして夫への不満など愚痴ることがあっても、これまでの自分たちの生き方に後悔や不満はない。

最近、娘に赤ちゃんが生まれた。娘の夫は毎週、実家に来てかいがいしく世話をしていく。自宅ではゴミ出しもしていると聞くと、若い世代の生き方は自分たちと違ってきたと感じている。

齋藤さんが考えるシニアライフの柱は、①気力、②健康、③時間、④お金、⑤会社モードからの脱却、の5つ。同世代の男性の9割は再雇用で働いている。彼らから「暇でしょ、何やってるの」とか「生活費はどうするの」と言われる。しかし、多くの男性がサラリーマン生活の後をどう生きるか「迷い道に入っている」と話してくれた。

人生の「四半期の最後」をスタートさせた齋藤さんが偶然出会ったのが、「あいホール」が企画する「男のチャレンジ塾」だったのである。好評で応募者多数の企画である。

実現すると信じて
やってきました

浜北、浜松で頑張る



吉田美恵子さん (71歳)

吉田美恵子さんは「浜松男女共同参画推進協会」の副理事長。まさに、男女共

同参画社会実現の綱を握っている。結婚前は仙台で学校関係に勤務していた吉田さんは、夫の実家のある浜松に来て夫の両親と同居した。つまり「嫁」になった。

すると、それまでのように、自由に自分の意志で動くことができなくなった。例えば、学校のPTAの役員の話も、自分の耳に入る前に姑の段階で断られていた。あるいは20代の頃、子どもを連れて仲間とキャンプに行った時、1人だけ、食事作りや作業の仲間に入らない男性がいた。その若い男性は、そういう仕事に男の自分を出すものではない、と思っっているようだった。

またある時は、「女は24歳になったらダメなんだ」という言葉を聞いて、なぜそんなことを言うのかと強い違和感

を感じた。その違和感こそが今の活動に繋がると言う。

はじめに、「はまきた女性懇話会」のメンバーになり、その後「あいホール」を受託する浜松男女共同参画推進協会にも参加した。活動と同時進行で夫の両親も看取った。

今、地域活動はメンバーが高齢化している。しかし、だからこそいろいろな人との出会いやコミュニケーションが大事だと思う。「元氣なうちにはこういう場に出てきましょうよ」と仲間にも声をかけている。だから夫を看取った後、また活動に戻ってくる仲間もいる。

「はまきた女性懇話会」では、小さい時から男女共同参画の意識を身につけさせたいと、保育園や幼稚園での絵本の読み聞かせなどもやっている。

男女共同参画社会は 緒についたばかり

この日、もう一人、柴泰正さんが参加してくれた。「あいホール」で「寄り道カフェ」というシニア世代が集まるグループが、月に一度活動している。柴さんはそのグループの参加者でもある。「寄り道カフェ」では、ほとんどしゃべらず「うーん」「うーん」と聞き役に徹していた。しかし、この柴さんの「聴いてるよ」という声がなかなか心地よい。そこで声をかけて参加してもらった。

柴さんは、「あいホール」が「青年婦人会館」として開設（1975「昭和50」年）された当初から、協会の活動・運営に参画してきた。柴さんもまた小松さんや齋藤さんと同じように猛烈に働いた男性で、日本の経済成長を支えてきたと、仕事への自負は大きい。インタビューした5人の言葉が示すことは、伝統的な考え方に立ち、性別役割分担によってがっちりとした。

組み立てられた日本の社会、地域、家族の姿である。まさに社会的・文化的に形成された性別すなわち「ジェンダー」を、一人ひとりが体現していた。このような人たちによって、地域社会は支えられてきた。

しかし今、日本社会は大きな変革の時代にある。その危機感を誰もが感じている。定年後の男性が生き迷っているという。仕事から解放されて次に何を支えにしようかという迷いである。女性たちは「私が死んだら夫の生活や食事はどうなる？」と心配しながら日々、台所に立つ。ケア役割を一手に担ってきた女性たちの心も平穏ではない。

人生は短いようで長い。今日、初めて男女共同参画について知ったとしても決して遅くない。最後に、同じシニア世代の私から次の言葉を贈ろう。「これまで道に立って、眺めよ。昔からの道に問いかけてみよ、それが、幸いに至る道か、と。その道を歩み、魂に安らぎを得よ」（エレミア書）



柴 泰正さん (81歳)

